



TITLE:

「二重目的語構文」再考--用法基盤モデルの観点から

AUTHOR(S):

年岡, 智見

CITATION:

年岡, 智見. 「二重目的語構文」再考--用法基盤モデルの観点から. 言語科学論集 2008, 14: 15-30

ISSUE DATE:

2008-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/88069>

RIGHT:

「二重目的語構文」再考

—用法基盤モデルの観点から—

としおか ともみ
年岡 智見

京都大学大学院

toshioka@hi.h.kyoto-u.ac.jp

1. 研究の背景と目的

1.1. 背景 —構文文法—

英語には複数の構文パターンが存在する。話し手は目的に従い、そのうち一つの構文を選択・使用し、意図する概念内容を聞き手に伝える。構文には、ある内容を伝達するのに向き不向きがあり、構文の選択および使用には意味的・語用論的要因が関わっている。例えば「ジョンがドアを蹴った」という内容は、(1)に示すように動能構文、他動詞構文、二重目的語構文などを利用して表現することができるが、各々の構文ではニュアンスが異なることが知られている。

- (1) a. John kicked at the door. (Conative Construction)
- b. John kicked the door. (Transitive Construction)
- c. John gave the door a kick. (Double Object Construction)

(1a)は「ドアをめがけて蹴った」という意味であり、実際に足が当たったか否か問わないのに対して、(1b-c)は実際に足が当たったことを意味する¹⁾。さらに、(1c)はドアが破損する等の何らかの影響がドアに及んだことまで含意する。(Dixon 2005: 472) 一般に、動能構文は「対象に行為を向ける」、他動詞構文は「対象に働きかける」、二重目的語構文は「対象にモノ(動作による影響を含む)を与える」という意味を表す。よって、特定の構文は特定のゲシュタルトの意味と密接に結びつき、我々言語使用者に特定のモノの見方を提供していると言える。このような思想のもと発展して来たのが、構文文法と呼ばれる理論である。この理論では、構文を「形式と意味のペア」もしくは「形式と意味から成る構成体」と捉え、その意味的・語用論的効果を探究している。(Fillmore 1988, Goldberg 1995, Langacker 2005ab) 本論文では、このような構文文法の枠組みから英語の二重目的語構文を再考する。

1.2. 分析の対象と目的 —二重目的語構文—

二重目的語構文は、[NP(Subject) Verb NP(Object1) NP(Object2)]という形式を取り、(2)に示すように典型的に「SによるO2のO1への授与」を意味する。

- (2) a. She *gave* Mike a drink of water from the tap. [LAAD]
 b. He's always *buying* me presents. [MEDAL2]

二重目的語構文と関連する構文に与格構文がある。与格構文とは、授与の相手を前置詞 *to* や *for* で導く他動詞構文である。(3)-(4)に示すように、二重目的語構文と与格構文はしばしば交替可能であるが、そこには微妙な意味の差違が認められる²。(Pinker 1989, Langacker 1991b, Goldberg 1995)

- (3) a. He tossed Tom the ball.
 b. He tossed the ball *to* Tom.
 (4) a. I made Mom a cheese sandwich.
 b. I made a cheese sandwich *for* Mom.

(3b)の *to* 付き与格構文³は、移動の経路に焦点が当たるため「Tomの方へ投げた」という意味を表し、Tomが実際にボールを受け取ったか否か問わない(ボールがTomの頭の上を越えて行ってもTomが寝ていてもよい)のに対して、(3a)はTomがボールをキャッチしたことを含意している。また、(4b)の *for* 付き与格構文は、「母親の利益になるように作った」という意味を表し、例えば、母親にあげるために作った場合に限らず、母親の代わりに父親のサンドイッチを作った場合やチーズサンドの作り方を知らない母親に実演して見せた場合にも可能である。他方、(4a)は母親にあげようと意図して作った場合に限られる⁴。このように、二重目的語構文は全般的に「使役所有」を含意すると言える。

しかし、中には「使役所有」を表しているとは言えない例も存在する。例えば、(5)に示すような「支払い請求」(代金を請求するという事態)を意味する場合や、(6)に示すような「コスト」(代価として金銭や時間を費やさせるという事態)を意味する場合がそうである。生起する動詞は各々、*charge*, *bill*, *fine* や *cost*, *take* である。

- (5) a. She *charged* me another ten pence for the paper bag. [OLWD]
 b. We *billed* her \$4000, 000. [NOAD2]
 c. They *fined* him \$125 for driving through a red light. [CDAE2]
 (6) a. The bounced check will *cost* you \$25 or more, ... [LAAD]
 b. The journey should *take* us about three days. [MEDAL2]

これらの場合、動詞の表す行為の結果、O1がO2を字義通り受け取るのではなく、逆に支払う必要性が生じる。この意味的特異性に加えて、(7)-(8)に示すように、与格交替に制限があるという統語的特異性も存在する。(Quirk et al. 1985)

- (7) a. The hotel *charged* me \$100.

- b. * The hotel *charged* \$100 {*to/for*} me.
- (8) a. Relocating staff *costs* employers considerable sums of money. [BNC]
 b. * Relocating staff *costs* considerable sums of money {*to/for*} employers.

また、請求やコストを表す二重目的語構文と意味的に関連するものに、(9)に示すような「節約」(支払い予定の金銭や時間の支払いを防ぐという事態)を表す二重目的語構文がある。請求・コスト・節約の3つの事態には共通して「支払い」という概念が背景にある。

- (9) a. Putting the nuclear plant in mothballs will *save* the government money. [LAAD]
 b. I'm in the position to *save* you a good deal of time. [CEDAL3]

本研究の目的は、特異な振舞いを見せる請求・コスト・節約の事態を表す二重目的語構文の分析を通じ、二重目的語構文全体を再考することである。特に、*give*, *send*, *buy* 等を用いた典型的な例とどのような関係にあるのか、そもそも請求・コスト・節約の事態が二重目的語構文で表現可能なのはなぜなのか、この3つの事態を表す動詞と二重目的語構文はどのような関係にあるのか等の問題を念頭に、動的用法基盤モデル(Langacker 1987, 2000)⁵やフレーム意味論(Fillmore 1977, 1982, 1985)の考え方を援用し、二重目的語構文の全体像の解明を目指す。

2. 先行研究の概観

構文文法の枠組みにおける先行研究には、1)一つの抽象的な項構造構文としての二重目的語構文を扱ったものと、2)複数の具体的なローレベルな構文の集合体としての二重目的語構文を扱ったものがある。前者として Goldberg(1995)を、後者として Croft(2003)を取り上げ、以下、順に概観する。

2.1. 項構造構文としての二重目的語構文

Goldberg(1995)は、二重目的語構文という項構造構文それ自体に“X(agent) CAUSES Y(Recipient) to RECEIVE Z(patient)”という意味があると仮定している。さらに、この意味は生起する動詞の意味に関係なく多義的であると主張している。二重目的語構文の多義性は、(10a)に示すような中心的意味と(10b-f)に示すような5つの拡張的意味から構成されるネットワークを成す。そして、これらの構文の意味と、(10a1-10f2)に示すような生起する動詞の意味が融合して、二重目的語構文の具体事例の意味が得られると説明される。

- (10) a. Agent successfully causes recipient to receive patient
1. Verbs that inherently signify acts of giving: *give*, *pass*, *hand*, *serve*, *feed*,...
 2. Verbs of instantaneous causation of ballistic motion: *throw*, *toss*, *slap*, *kick*, *poke*, *fling*, *shoot*,...

- 3. Verbs of continuous causation in a deictically specified direction: *bring, take,...*
- b. Conditions of Satisfaction imply that agent causes recipient to receive patient
 - 1. Verbs of giving with associated satisfaction conditions: *guarantee, promise, owe,...*
- c. Agent causes recipient not to receive patient
 - 1. Verbs of refusal: *refuse, deny*
- d. Agent acts to cause recipient to receive patient at some future point in time
 - 1. Verbs of future transfer: *leave, bequeath, allocate, reserve, grant,...*
- e. Agent enables recipient to receive patient
 - 1. Verbs of permission: *permit, allow*
- f. Agent intends to cause recipient to receive patient
 - 1. Verbs involved in scenes of creation: *bake, make, build, cook, sew, knit,...*
 - 2. Verbs of obtaining: *get, grab, win, earn,...* (Goldberg 1995: 38)

Goldberg(1995)では、請求・コスト・節約の事態を表す二重目的語構文は扱われていない。また、これらの事例は、構文の意味を単に CAUSE-RECEIVE（受け取らせる）とする分析では説明することができないと思われる。

2.2. ローレベル構文としての二重目的語構文

Croft(2003)は、Goldberg(1995)の研究を受けて一部修正を施しつつ、異なる構文観を提示している。まず彼は、(11)に示すような動詞 *cost* や *set back* を用いた事例も分析の射程に入れ、(12)に示すような意味を割り当てている。

- (11) a. That vase *cost* him \$300.
 b. The painting *set* him *back* \$500. (Croft 2003: 55)
- (12) Acquisition of goods causes recipient to no longer have possession of money. (*ibid.*)

また Croft(2003)は、Goldberg(1995)の主張する構文の多義性を否定している。もし、構文自体が真に多義的なのであれば、例えば、動詞 *kick* が(10c)の意味で現れてもよいはずであるが、実際には(10a)の意味でしか用いられない。つまり、(10a-f)に示す各々の意味は、特定の動詞クラスと密接に結びついているのである。よって、「各々の意味に対する構文スキーマには、共起する動詞クラスの情報が含まなければならない」として、彼は(13)に示すような動詞クラスの指定された構文(verb-class-specific constructions)を設定している。(13)は各々、[形式]と[意味]のペアから成り、XPoss は所有権の移送(transfer of possession)を表している。

- (13) A1. [[SBJ GIVING.VERB OBJ1 OBJ2] / [actual XPoss]]
 A2. [[SBJ BALL.MOT.VERB OBJ1 OBJ2] / [actual XPoss via ballistic motion]]
 A3. [[SBJ DEIC.CAUS.VERB OBJ1 OBJ2] / [actual XPoss via deictic caused motion]]

- B1. [[SBJ COND.GIVING.VERB OBJ1 OBJ2] / [conditional XPoss]]
 C1. [[SBJ REFUSE.VERB OBJ1 OBJ2] / [negative XPoss]]
 D1. [[SBJ FUT.VERB OBJ1 OBJ2] / [future XPoss]]
 E1. [[SBJ PERMIT.VERB OBJ1 OBJ2] / [enabling XPoss]]
 F1. [[SBJ CREATE.VERB OBJ1 OBJ2] / [intended XPoss after creation]]
 F2. [[SBJ OBTAIN.VERB OBJ1 OBJ2] / [intended XPoss after obtaining]]
 G1. [[SBJ COST.VERB OBJ1 OBJ2] / [depriving XPoss via paying]] (ibid.: 57)

さらに(13C1)や(13E1)に関しては、(14)に示す容認性の違いから、(15)に示すような動詞の指定された構文(verb-specific constructions)を設定する必要があるとしている。

- (14) a. Sally {permitted/ allowed/ *let/ *enabled} Bob a kiss.
 b. Sally {refused/ denied/ *prevented/ *disallowed/ *forbade} him a kiss.
 (Goldberg 1995: 130)
- (15) a. [[SBJ permit OBJ1 OBJ2] / [enabling XPoss by permitting]]
 a'. [[SBJ allow OBJ1 OBJ2] / [enabling XPoss by allowing]]
 b. [[SBJ refuse OBJ1 OBJ2] / [negative XPoss by refusing]]
 b'. [[SBJ deny OBJ1 OBJ2] / [negative XPoss by denying]] (Croft 2003: 58)

以上のような具体性の高い構文は、英語話者が実際に構築し用いているであろう心的表示として仮定されている。この分析の背景にあると考えられるのは、動词的用法基盤モデルの言語観である。(Langacker 1987, 2000) 次節では、このモデルの紹介を行うとともに、Croft(2003)の不備を指摘する。

3. 研究の方向性 一動词的用法基盤モデル—

本研究は、Croft(2003)のローレベルな構文を想定する立場に基本的に賛成である。動詞と構文は、現実の言語使用において表裏一体となって現れるため、根本的に切り離して捉えることはできない。両者を取り込んだ具体性の高い構文を認めることにより、生起する動詞に関する過剰一般化を避けることができる。例えば、請求やコストの事態を表す二重目的語構文の存在から、二重目的語構文に「所有権の剥奪」(CAUESE-LOSE)の意味があると仮定すると、動詞 *rob*, *strip*, *steal* 等も生起可能であると間違って予測してしまう。

- (16) a. * A gang of thieves *robbed* people in the town their possessions.
 b. * They *stripped* the prisoners weapons and cash.

従って、抽象的な項構造構文それ自体には弱い意味しかなく、より具体的な構文のレベルで特定の意味と結びついていると考えられる。

以上のような構文観の背景にあるのは、Langacker(1987, 2000)等で提唱されている動的用法基盤モデルである。このモデルでは、実際の言語使用（発話）に基づき言語知識が構築されると考える。この言語知識を構成するのが、ボトムアップ的に抽出されたスキーマの集合である。スキーマ化は、言語表現の持つ諸側面に注目することで様々な方向へ進み、全体として巨大なネットワークを形成している。スキーマの具体事例の使用頻度が高ければ、そのスキーマの定着度が増し、たとえ、より抽象的なスキーマに包含されようとも共存することができる。例えば Langacker(2005a)は、二重目的語構文と動詞 *send* の関係を図1のように図示している。ボックスの太さは定着度（アクセスのしやすさ）を、矢印は具象化を表す。左の円には、二重目的語構文の具体事例から抽出されたスキーマが、右の円には動詞 *send* の具体事例から抽出されたスキーマが表示されている。二重目的語構文と動詞 *send* の共起情報は、左右の円の交わり部分にある $[[\text{send}_1][\text{NP}][\text{NP}]]$ というスキーマに存在する。この図が物語っているのは、構文と動詞が実は同じ性質のものだということである。本研究では、このモデルの言語観を採用し、第5節で二重目的語構文全体のネットワークを提示する。

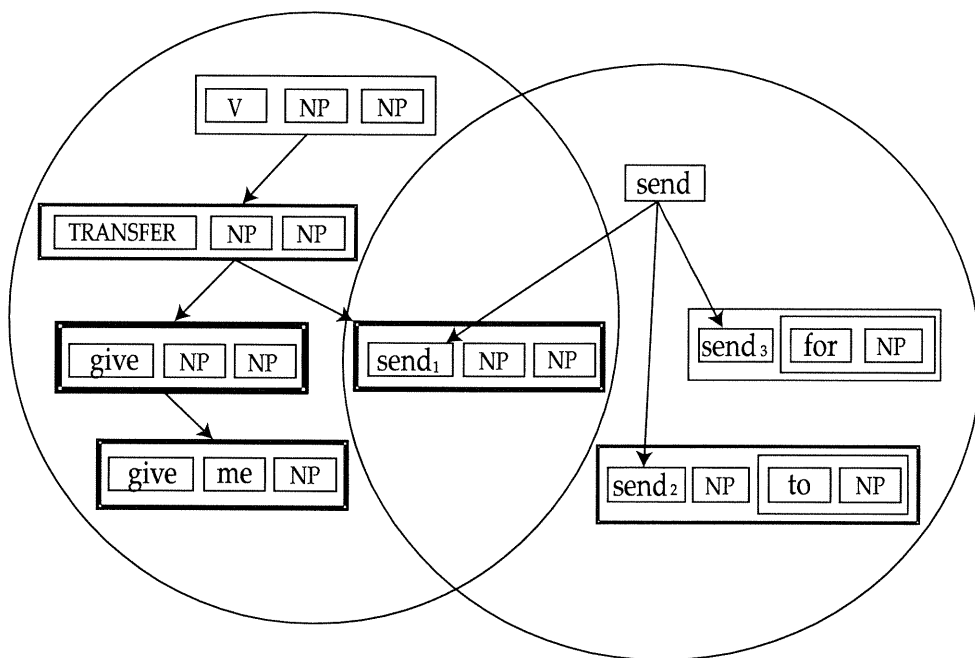


図 1: 動詞と構文のスキーマのネットワーク (Langacker 2005a: 145)

動的用法基盤モデルを背景に分析を行った Croft(2003)には、いくつか改良すべき点がある。彼は、コストの事態を表す二重目的語構文に対して[depriving transfer of possession via paying]（支払いを通じての所有権の剥奪）という意味を与えているが、これを、請求の事態を表す二重目的語構文と比較してみると、(17)に示すように、前者は「実際の剥奪」を、後

者は「意図された剥奪」を意味することが分かる。従って、各々に対する構文スキーマは、正確には(18)-(19)に示す通りである。

- (17) a. # The shirt *cost* him \$500, but he didn't pay.
 b. They *charged* him \$500 for the shirt, but he didn't pay.
 (18) [[SBJ COST.VERB OBJ1 OBJ2] / [actual depriving XPoss via paying]]
 (19) [[SBJ CHARGE.VERB OBJ1 OBJ2] / [intended depriving XPoss via paying]]

さらに、節約の事態を表す二重目的語構文は「(予定していた)所有権の剥奪を起こさない」という意味なので、「否定の剥奪」を意味すると考えられる。従って、その構文スキーマは、(20)に示す通りである。

- (20) [[SBJ SAVE.VERB OBJ1 OBJ2] / [negative depriving XPoss via paying]]

所有権の移送に、実際の移送・意図された移送・否定の移送などのサブタイプがあるのに平行して、所有権の剥奪にも、実際の剥奪・意図された剥奪・否定の剥奪があることが判明した。その他のサブタイプの剥奪が言語表現として存在するか否かに関しては、今後調査する必要がある。

4. 請求・コスト・節約を表す二重目的語構文の分析

本節では、請求・コスト・節約の事態を表す二重目的語構文の意味的・統語的特異性に関する分析を行い、3者の共通点と相違点を明確にする。4.1節では3者に共通する意味的性質を、4.2節では互いに異なる統語的振舞いを考察する。

4.1. 共通の百科事典的フレーム知識

請求・コスト・節約を表す二重目的語構文では、「O1がO2を支払う」という関係が表される。この関係を主語Sが、請求の場合には引き起こそうとし、コストの場合には引き起こし、節約の場合には引き起こさないようにする。請求の事態におけるO2は金銭である。金銭は、(5)に示したように具体的な金額が明示される時もあれば、(21)に示すように相対的な分量が示される時もある。

- (21) a. It does not make sense to *charge* all users *the same rate*,... [BNC]
 b. They *fined* her *the maximum possible* for the offence. [OCDSE]

コストと節約の事態におけるO2は、金銭・時間・労力などの資源である。具体的な金額や所要時間の例は、上述の(6)と以下の(22)に、相対的な金額や所要時間の例は、以下の(23)と上述の(9)に示す通りである。そして、労力の例は、以下の(24)-(25)に示す通りである。

- (22) a. New computer systems could *save* us *millions of dollars* in lost time. [LAAD]
 b. Going to work by train instead of by car *saves* me *half an hour*. [OLWD]
- (23) a. The repairs to my car *cost* me *a lot of money*. [CIDE]
 b. ...the job would *take* me *some considerable time*... [BNC]
- (24) a. ...a climb which *cost* him *all the strength* that was left him. [BNC]
 b. ..., it seemed to be *taking* five flunkies in grey uniforms *a lot of effort* to usher one middle-aged man into... [BNC]
- (25) This could *save* you *a lot of work* later. [BNC]

ちなみに、コストの事態において O2 に金銭を取るのは動詞 *cost*、時間を取るのは動詞 *take* である可能性が高い。ただし、(26)に示すように必ずしもその限りではない。動詞 *cost* の文は、金銭や時間が何かの代償として犠牲になることを表すが、動詞 *take* の文は、行為の達成のために金銭や時間が必要であることを表す。

- (26) a. ...but pulling in for a pit-stop would *cost* him *precious seconds*. [BNC]
 b. ...it will *take* the oil companies a great deal of time and *money* to cover them. [BNC]

また、(27)-(28)に示すように、コストと節約の事態の場合には、金銭・時間・労力以外の大切なモノ、例えば仕事・健康・愛・チャンス・勇気などが O2 に現れることもある⁶。

- (27) a. All this delay at the warehouse has *cost* the firm *an important contract*. [LLA]
 b. After all, it may have *taken* them *quite a lot of courage* to criticize you in the first place. [BNC]
- (28) Rigid adherence to reporting guidelines *saved* Rick *his job*, but earned him the enmity of his coworkers. (NHK ラジオ講座『ビジネス英会話』2007/06/20-21, テキスト p. 42)

以上のように、請求・コスト・節約の事態を表す二重目的語構文の背景には、「(売買取引で商品・サービスを獲得するため、不法な行いを償うため、旅行・出勤・仕事などの行為を達成するため等の理由で) O1 が O2 を支払う」という支払いに関する百科事典的フレーム知識が共通に存在する。

4.2. 与格交替の可能性

本節では、与格交替の可能性とその要因を請求・コスト・節約の順に検討する。請求の事態を表す二重目的語構文は、(7)で確認したように与格交替に制限がある⁷。その第一の要因として、(29)に示すように、請求を表す動詞は他動詞構文の目的語に請求相手を取ることができるという事実がある⁸。

- (29) a. The hospitals charge *the patients* for every aspirin... [CEDAL3]
 b. We won't bill *you* until you are sure you're satisfied with the product. [LLA]
 c. The cop's just fined *me* for having no tax on my car. [LLA]

つまり、請求という行為は、商業取引における人から人へ（請求者から被請求者へ）の働きかけを表し、その付随要素として金銭が関与すると考えられる。従って、被請求者は高い認知的際立ちを有するため、あえて、目的語より際立ちの低い要素を導く前置詞 *to* や *for* の目的語位置で導入する必要がない。また、付随要素とみなせる請求金額は、Quirk et al.(1985: 735)が指摘するように、*what* のみでなく *how much* で尋ねられること等から、目的語としての性質と副詞としての性質を兼ね備えている。

- (30) a. ...we have no idea in advance *what* the publishers are going to charge us for journals.
 [BNC]
 b. I wonder *how much* they charge me for that. [BNC]

動詞 *cost* の目的語も、通常の目的語とは異なる性質を持つ。(Quirk et al. 1985, Langacker 1991a) 例えば、請求の場合と同様に *what* と *how much* のどちらも使用可能である上、受身の主語になれない。Langacker(1991a: 343-345)によると、動詞 *cost* の目的語は、主語の指示対象の特性を測るための抽象的なスケールにおける一地点であり、主語と目的語の関係は、参与者とセッティングの関係に近い。この観察の妥当性は、以下の(31)によっても示される。

- (31) a. A professionally installed alarm will cost *from about £500*. [OCDSE]
 b. The scheme will cost *in the region of six million pounds*. [CEDAL3]

請求やコストを表す二重目的語構文は、以上のような目的語の副詞的性質と i) 主語 S から O1 への物体の移動がないこと、ii) O1 (=支払人) が受益者ではないこと等から、i) *to*-与格交替や ii) *for*-与格交替を起こさないと考えられる。

ただし、動詞 *take* は(32)に示すように、形式主語の *it* と真主語の *to* 不定詞を伴う場合、*for*-与格交替を起こすように見える。しかし、この *for* 句は、動詞 *take* の取る与格というより、*to* 不定詞の意味上の主語の役割を果たす。(32)では、時間の支払人と行為者が同一であるために、両方の統語パターンが可能なのである⁹。(33)では、時間を費やす人と *to* 不定詞の行為者が一致しないため、二重目的語構文と *for* 句が共起している。また、通常与格交替を起こさない動詞 *cost* も、(34)-(35)に示すように同様の振舞いを見せる。

- (32) a. *It'll take him time to recover from the illness.*
 b. *It'll take time for him to recover from the illness.*

- (33) We were late in introducing this concept: *it took me three years of persuasion for politicians to accept the idea.* [BNC]
- (34) a. *It cost us a million dollars to build the stadium.*
 b. *It cost a million dollars for us to build the stadium.*
- (35) *It's gonna cost him at least fifteen quid for me to wipe it off.* [BNC]

最後に、節約を表す動詞 *save* を用いた二重目的語構文に関しては、(36)に示すように *for*-与格交替が可能である。これは、二重目的語構文の O1 に生起する支払人が、(支払い予定だった) 金銭・時間・労力などを支払わなくて済んだ受益者であることによる。

- (36) a. The tax changes *save* me £9 a week. [CIDE]
 a'. The tax changes *save* £9 a week *for* me. [CIDE]
 b. Thanks for your help- it *saved* me a lot of work. [CIDE]
 b'. Thanks for your help- it *saved* a lot of work *for* me. [CIDE]

節約の事態は、失われるはずだった資源が支払人の手元に残るという状況を生じさせるため、誰かに何かを獲得させるという獲得の事態の一種とみなすことが可能である。事実、(37)に示すように、獲得を意味する動詞 *win, earn, gain* などは、動詞 *save* と同じく *for*-与格交替を起こす。つまり、節約を表す二重目的語構文こそが、支払いという百科事典的フレーム知識を介して、使役所有を含意する通常の二重目的語構文と、請求やコストを表す特殊な二重目的語構文との架け橋になっていると推測される。

- (37) a. It was his goal that *won* us the match. [CALD3]
 b. It was his goal that *won* the match *for* us. [CALD3]

5. 二重目的語構文のネットワーク

本節では、二重目的語構文の全体像を明らかにすることを目的に、動的用法基盤モデルに基づいて、具体レベルから抽象レベルに及ぶ包括的な構文ネットワークを提示する。この目標に先立ち、まず二重目的語構文の意味を再考する。

第1節で確認したように、二重目的語構文には一般に使役所有の意味があるとされるが、問題になるのが、請求やコストの事態を表す表現である。4.1 節で述べたように、請求・コスト・節約の事態を言語化する際には、背景にある支払いに関する百科事典的フレーム知識が喚起される。このフレームの中核をなす「人が何かの代価として資源を支払う（もしくは資源でもって支払う）」という意味構造の成立条件として、そもそも人はその資源を所有していなければならないという「前提の所有」が必要である。いわゆる使役所有（S が O1 に O2 を与えて所有させる）とは、「結果の所有」を引き起こすことを表す。しかし、請求やコストの

事態も、前提の所有を引き起こすという意味では、広義の使役所有である。つまり、[SV O1 O2]という抽象的な二重目的語構文に意味があるとすれば、それはやはり使役所有だろう。

別の見方をすると、動詞 *give, buy* 等を用いた通常の二重目的語構文は「プラスの移送」を、請求やコストの事態を表す二重目的語構文は「マイナスの移送」を意味する。どちらも、主語 S が相手 O1 への働きかける（影響を及ぼす）というエネルギーの移送(TRANSFER)がある点では同じである。しかし、プラスの移送では、エネルギーの移送に伴って、モノ(O2)の移送も行われる。つまり、プラスの移送は、相手にモノを与えるという形でのエネルギー移送である。他方、マイナスの移送は、相手からモノを引き出そうとするエネルギーの移送である。ところで、人から人へのエネルギー移送は、目的語に人を取る他動詞構文(e.g. *I persuaded Sally to go with me to the concert.* [LLA])でも表されるが、二重目的語構文では、何らかの所有関係を引き起こそうとするエネルギー移送に限られる点に違いがある。

以上の議論を総合すると、二重目的語構文の構文ネットワークは、次ページの図2に示す通りである。図2においてボックスで囲まれた部分が各々、スキーマであり構文である。これらの構文スキーマは、形式（ボックス内の上部に表示）と意味（ボックス内の下部に表示）のペア（両者を結ぶ線で表示）から成立する。左に進むほど抽象的なレベルに、右に進むほど動詞クラスや動詞が限定された具体的なレベルになる。ネットワークは主に、CAUSE-RECEIVE（プラスの移送）を意味する上半分と、CAUSE-PAY（マイナスの移送）を意味する下半分に分かれる。左から4番目の並びが、動詞クラスの指定された構文、5番目の並びが、動詞の指定された構文のレベルである。6番目に来ると考えられるのは、時制などで活用した動詞の指定された構文だろう。動詞クラスの指定された構文は、現実性を表すもの、法性を表すもの、意図性を表すものの3種類にまとめられる。主な略語は以下の通りである。T.=TRANSFER, P.T.=PLUS TRANSFER, M.T.=MINUS TRANSFER, C-R=CAUSE-RECEIVE, C-P=CAUSE-PAY. (その他の略は Croft(2003)に従う。)

ボックスの線の太さは、定着度（アクセスのしやすさ）を表している。点線、実線、太い実線の順に定着度が高くなる。二重目的語構文に生起する、特定の動詞クラスに属する動詞の数がごくわずかであれば、動詞の指定された構文の定着度が高まると予想される。従って、請求・コスト・節約の事態を表す二重目的語構文の場合も、動詞の数が限られるため、動詞の指定された構文の定着度が高いと考えられる。

節約の動詞 *save* の指定された構文スキーマが、獲得という動詞の意味クラスの指定された構文スキーマと点線でつながれているのは、4.2節の終わりで述べたように、前者を後者の一種とみなすことが可能だからである。「否定の」マイナスの移送は、プラスの移送でもある。つまり、節約を表す二重目的語構文は、ネットワークの上半分と下半分の共有地点に位置すると考えられる。

図2は、大まかな傾向を示した概略図である。今後より詳細な調査を行い、精緻化する必要がある。特に定着度の差に関しては、心理実験などを行い、確証を得る必要がある。しかし、これまで例外扱いされることの多かった、請求・コスト・節約の事態を表す二重目的語構文を包括する形で、構文ネットワークを提示したことは有意義であろう。

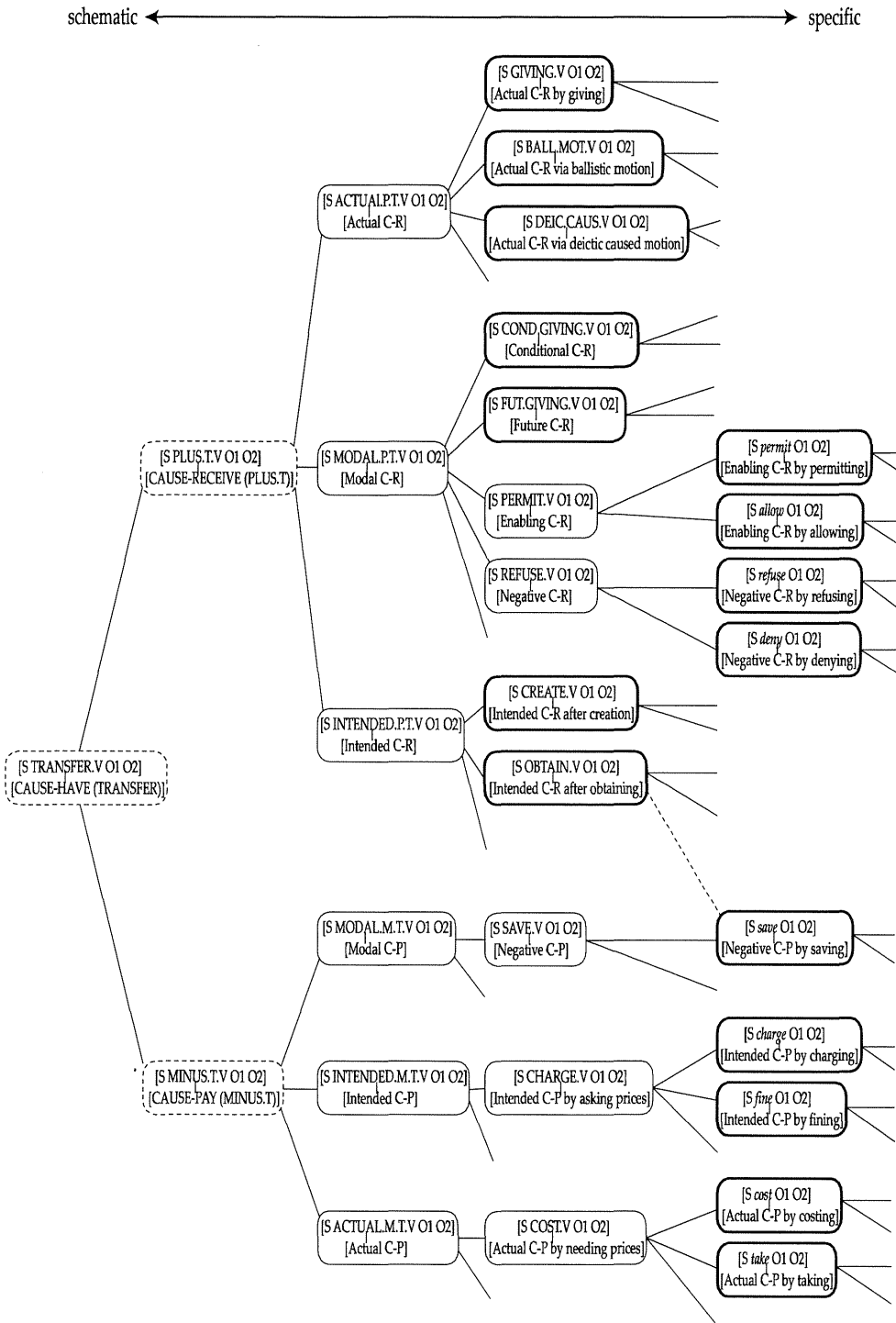


図 2: 二重目的語構文のネットワーク

6. まとめと今後の展望

本論文では、英語の主要な項構造構文の一つである二重目的語構文の再考を行った。特に、意味的・統語的に特異な振舞いを示す、請求・コストの事態を表す言語表現を中心に、分析を行った。その意味的特異性は、一般に二重目的語構文に帰せられる「使役所有」という意味との不一致にある。本論文では、これらの表現の背後には共通して、支払いに関する百科事典的フレーム知識が存在することを指摘したが、この支払いという行為には前提として、支払人による資源(金銭・時間・労力など)の所有が必要である。請求やコストの事態は、この「前提の所有」を引き起こすという意味で、広義の使役所有を表していると言える。従って、二重目的語構文自体に意味を認めるとするならば、それは広義の使役所有もしくは所有関係を引き起こそうとするエネルギーの移送だと考えられる。

しかし一方で、この意味特徴は抽象的すぎて漠然としているため、生起する動詞の種類や、特定の動詞が生起した時に表される意味(例えば、獲得の動詞なら「意図された使役所有」)などを限定することができない。よって、本研究では動詞用法基盤モデルの言語観を採用し、動詞や動詞クラスの指定された具体的な構文の存在を仮定した。そして、抽象レベルから具体レベルに至る様々な構文スキーマによって構成される、二重目的語構文のネットワークを提示した。この構文ネットワークは、CAUSE-RECEIVE(プラスの移送)を意味する通常の二重目的語構文と CAUSE-PAY(マイナスの移送)を意味する請求やコストの二重目的語構文の二手に分かれている。この二者を取り持つのが、節約の事態を表す言語表現である。節約の事態は、一方で「資源の不必要な支払いを防ぐ」(CAUSE not to PAY)という状況を表すため、請求やコストの事態と密接な関係にあり、他方で「資源を取り置く」ことでもあるため、獲得の一種とみなすことができる。

Goldberg(1995)等の構文文法における従来の構文研究は、動詞(の意味)か構文(の意味)かの二分法に陥りがちであった。しかし、実際の言語使用において、統語的鋳型としての構文が構文だけで現れることはなく、必ず具体的な動詞や名詞などの語彙を要求する。ここに、語彙の種類を指定したローレベルな構文の重要性がある。本論文では、動詞の種類を指定した構文スキーマをもとにネットワークを記述したが、Croft(2003)でも指摘があるように、動詞の種類が限定されれば、主語・目的語などに生起する名詞の種類も限定される。よって今後は、(38)に示すような名詞の意味も取り込んだ構文を提案し、二重目的語構文のより正確な全体像を示す必要があると考えられる。

- (38) [[AGENT(SELLER).N. CHARGE.V. PATIENT(BUYER).N. THEME(MONEY).N.] /
[Intended CAUSE-PAY via commercial transaction]]

注

1. (1a)は実際に足があたりなかった場合やあたってもし効果が見られない場合にも発話される。
2. 所有権の移送を意味する動詞(e.g. *give*, *sell*)の場合には、二重目的語構文と *to* 付き与格構文

の間の意味的差違はほとんど認められず、代わりに語用論的差違が問題となる。紙面の関係上、語用論的差違に関しては、本論文では扱わない。

3. *to* 付き与格構文は使役移動構文の一種とみなすことができる。(Goldberg 1995)
4. ただし、*to* 付き与格構文と交替する場合と異なり、*for* 付き与格構文と交替する二重目的語構文は、授与の成功までは含意せず、意図の段階を含意する。
5. 動的用法基盤モデルの「動的」という語は Langacker(2000)以降用いられるようになった。
6. コストと節約の事態を表す二重目的語構文では、犠牲となる大切なモノだけでなく、(i)に示すように、何かが犠牲となった結果状態を表す名詞も O2 に生起することがある。この現象の詳細な分析に関しては、東(1990)、Nemoto(1998)、年岡(2008)等を参照されたい。

- (i) a. "Your - your integrity cost me *an awful lot of misery*," she whispered. [BNC]
b. I'm glad you offered - it saved me *the embarrassment* of having to ask. [OALD7]

7. 動詞 *charge* は与格交替を起こすこともあるが、その O2 は *fee, expense, price* 等に限られる。
8. 請求を表す動詞 *charge* は、本文中の(29)に示すように、他動詞構文の目的語に被請求者を取ることもあれば、以下の(ia)に示すように金銭を取ることもある。さらに、(ib)に示すように自動詞構文で用いられることもある。

- (i) a. Small shops *charge much higher prices* for the same products. [LLA]
b. Most clubs *charge* for the use of tennis courts. [MEDAL2]

Goldberg(1995)では、構文の意味と融合する動詞の意味として、動詞の指定する参与者役割とその語彙的プロファイルを想定している。プロファイルされる役割とは、定形節で通常義務的に表される要素である。しかし、動詞 *charge* のような、他動詞構文の目的語に異なる二種類の名詞を取る動詞の語彙的プロファイルを決定するのは困難である。

9. 動詞 *take* を用いた以下の2文はニュアンスが異なる。(小西 1980: 1856)

- (i) a. It took five years *for* him to write the book.
b. It took him five years to write the book.

前置詞 *for* を用いた(ia)は、行為の所要時間を客観的に表すのに対して、二重目的語構文を用いた(ib)では、所要時間が行為者に直接関係づけられ、行為者の長い苦労・努力・負担などが含意される。この事実は、コストの事態を表す二重目的語構文の背景にある、代価の支払いに関する知識によるものと考えられる。

参考文献

- Croft, William. 2003. Lexical Rules vs. Constructions: A False Dichotomy. In Hubert Cuyckens, Thomas Berg, Rene Dirven, and Klaus-Uwe Panther (eds.), *Motivation in Language: Studies in Honour of Günter Radden*, 49-68. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

- Dixon, Robert M.W. 2005. *A Semantic Approach to English Grammar* (Revised and enlarged 2nd edition). Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles J. 1977. Topics in Lexical Semantics. In R. Cole (ed.), *Current Issues in Linguistic Theory*, 76-138. Bloomington: Indiana University Press.
- Fillmore, Charles J. 1982. Frame Semantics. In Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm*, 111-138. Seoul: Hanshin.
- Fillmore, Charles J. 1985. Frame and the Semantics of Understanding. *Quaderni di Semantica* 6(2): 222-54.
- Fillmore, Charles J. 1988. The Mechanisms of 'Construction Grammar.' *BLS* 14: 35-55.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Construction: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Goldberg, Adel E. 1998. Patterns of Experience in Patterns of Language. In Michael Tomasello (ed.), *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, 203-219. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Goldberg, Adele E. 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Green, Georgia. 1974. *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington: Indiana University Press.
- Gries Stefan Th. and Anatol Stefanowitsch. 2004. Extending collostructional analysis: A corpus-based perspective on 'alternations.' *International Journal of Corpus Linguistics* 9(1): 97-129.
- 東信行. 1990. 「両面性について」, 国広哲弥教授還暦退官記念論文編集委員会(編)『文法と意味の間: 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』219-237. 東京: くろしお出版.
- 岸本秀樹. 2001. 「二重目的語構文」, 影山太郎(編著)『日英対照 動詞の意味と構文』127-153. 東京: 大修館.
- 児玉一宏. 2003. 「認知語彙論と構文の習得」, 吉村公宏(編著)『認知音韻・形態論』241-283. 東京: 大修館.
- 小西友七. 1980. 『英語基本動詞辞典』 東京: 研究社.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991a. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991b. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2000. A dynamic usage-based model. In M. Barlow and S. Kemmer (eds.), *Usage-Based Models of Language*, 1-63. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. 2003. Constructions in Cognitive Grammar. *English Linguistics* 20(1):

41-83.

- Langacker, Ronald W. 2005a. Construction Grammars: cognitive, radical, and less so. In Francisco J. Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.), *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*, 101-159. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2005b. Integration, grammaticization, and constructional meaning. In Mirjam Fried and Hans C. Boas (eds.), *Grammatical Constructions: Back to the roots*, 157-189. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Nemoto, Noriko. 1998. On the Polysemy of Ditransitive *Save*: The Role of Frame Semantics in Construction Grammar. *English Linguistics* 15: 219-242.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, MA: MIP Press.
- Radden, Günter, and Rene Dirven. 2007. *Cognitive English Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Stefanowitsch Anatol and Stefan Th. Gries. 2003. Collocations: Investigating the interaction of words and constructions. *International Journal of Corpus Linguistics* 8(2): 209-243.
- Taylor, John R. 2003. *Linguistic Categorization* (3rd edition). Oxford: Oxford University Press.
- 年岡智見. 2008. 「二重目的語構文に現れる二面性に関する意味的考察」, 児玉一宏・小山哲春(編著)『言葉と認知のメカニズム ―山梨正明教授還暦記念論文集―』47-59. 東京: ひつじ書房.

コーパス

The British National Corpus. [BNC]

辞書

- Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (3rd edition). 2008. [CALD3]
- Cambridge Dictionary of American English* (2nd edition). 2007. [CDAE2]
- Cambridge International Dictionary of English*. 1995. [CIDE]
- Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners* (3rd edition). 2001. [CEDAL3]
- Longman Advanced American Dictionary*. 2000. [LAAD]
- Longman Language Activator*. 1992. [LLA]
- Macmillan English Dictionary for Advanced Learners* (2nd edition). 2007. [MEDAL2]
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (7th edition). 2005. [OALD7]
- Oxford Collocations Dictionary for Students of English*. 2002. [OCDSE]
- Oxford Learner's Wordfinder Dictionary*. 1997. [OLWD]
- The New Oxford American Dictionary* (2nd edition). 2005. [NOAD2]